

## 1. 水源かん養の効果・モニタリング

森林などが水源かん養に及ぼす効果を直接計測することは困難であるので、森林、農地、宅地や道路など浸透域の面積変化などを指標として把握するのが良い。ただし、最近では道路面でも浸透性舗装を採用するなどしており難しい面もある。

また、森林施業・管理は、森林の水源かん養を維持、向上していく上で大切であることから、間伐などの森林施業が実施された面積を評価するのも一つの方法であると考えられる。

## 2. 調査・研究の枠組み

今後は事業とのセットとして（枠組みの中で）、調査・研究、データ収集、モニタリングが一連のものとして実施される必要がある。

## 3. 住民参画・実践、交流・情報

都市住民の森林整備などへの参画の実態に関するデータベースの整備や情報発信をさらに推進する必要がある。地域住民の事業に関する理解を深めるとともに、リーダーとして活動できる人材を育成することも望まれる。

## 4. 第2期計画期間に向けた計画策定

第1期計画期間の成果や問題点を踏まえ、第2期の目標の見直しを検討する必要がある。個々の事業が全体系のどこに位置づけられ、どのような効果が期待されるのかなどについて、事業者にも明確に分かるような整理が必要である。また、計画期間途中でのチェック（進捗状況の評価）が必要である。データを集積するために、モニタリングの実施を強化することが望まれる。水源かん養と水質保全のように分野間にまたがり効果を発現する施策のあり方、評価などについても検討していく必要がある。

以上